雲鷹丸　第6次(明治44年度第1次)航海報告書

明治44年7月8日～10月28日

出帆準備

明治44年6月上旬、漁艇漁具及諸帆索具等修理を終了。

6月15日、石川島船渠に入渠し、船体機関の修繕及船体検査に着手し、26日竣工し、品川沖に回航す。それより「バラストブロック」積移方及び炭水、漁艇並びに漁獲物用塩等の搭載に従事す。

7月 5日　黒田技師、鎌田技手指導の下に漁場科第3学年生徒23名乗船す。

7月 6日　川上助手乗船す。

7月 7日　糧食全部搭載を終り、出帆準備を整ふ。

航海日誌

7月 8日　午前9時20分、抜錨汽走す。11時40分、横浜沖に於て漁場科第2年生の実習艇逆風に縫航せるに遭ひ、曳きて館山に向ふ。午後4時52分、館山に投錨す。

7月 9日　捕鯨艇ドーリー、漁具の一部及前年の残塩を搭載す。(本日臨時漁夫小澤熊吉を傭入る。)

7月10日　午前、捕鯨演習を行ひ、午後生徒の健康診断を行ひ、異常なきを認む。6時抜錨汽走し、7時45分適風を得て、機関を停止帆走捕鯨場に向ふ。

7月11日　午前9時、東経141度40分、北緯35度55分に於て、鮫1尾を捕獲す。午後10時、航海直を三直に定む。

7月12日　捕鯨用具配給整備をなし、檣上に見張を置く。

7月13日　捕鯨場に達したるを以て汽缶に点火をなさしめ、午前6時より汽走鯨群捜索を行ふ。午後1時半、風浪稍募り捜索し難きに至り、汽走を中止し、再び総帆を展して帆走する事3日に及ぶ。

7月16日　午前7時半、風波鎮静したるを以て汽走捜索を行ひしも得る所なく、午後4時20分、機関を停止して装帆航進す。

7月17日　午前7時20分　帆を収めて汽走捜索を行ふ。7時45分、東経145度26分、北緯38度50分に於て、30余頭の抹香鯨群に遭ひ、直ちに諸艇を下して追撃せしむ。鯨群は巧に艇を避け、漸次南西方に遊退し、各艇は競ふて之を追ふ事数時間、漕行距離約40海里に及びたるも、尚容易に追及し難きを以て、午後1時半、一時各艇を納め、本船自ら急進追尾する事約2時間にして、午後3時半、北緯38度45分、東経143度44分に於て、再び近距離に迫り、各艇を放つ。3時45分、B号艇は1鯨に投銛し得。他艇尚余群を追って約2時間に渡りしも、彼等の退遊更に速にして、遂に其群を失ひたり。其間に於て、B艇はその鈎し得たる鯨に曳かれつつ屢々投矢したるも尚斃死せざりしを以て、本船各艇を曳て之に赴き合せしむ。午後6時40分、鯨遂に斃れたるを以て之を本船に引き付け、各艇を納め、終夜解剖採油に従事しつつ装帆漂泊す。

7月18日　午前2時、鯨の裁解を終り、採油事業を継続す。此日細雨にして浪あり、捜索

の便を得ず。午後1時東経143度53分、北緯39度53分に於て鰹群を見、16尾を獲たり。此夜強風となる。

7月19日　夜来強風浪あり、捜索を得ず。帆走南西に進む。夜に入りて風力稍凪ぐ。夜9時鮫１尾を釣獲す。

7月20日　強風浪の為捜索をなさず、終日帆走す。

7月21日　強風浪にして捜索を得ず、終日帆走、北西に進む。正午東経143度49分、北緯38度39分に於て鰹の大群を見、釣獲約200尾あり。

7月22日　東風浪雄烈にして雨を交ひ、気圧降下を始め天候変兆あり。且つ予定期日残余多からざるを以て針路を北方に取り函館を拮し帆走す。

7月23日　天候風浪前日に同じ。此日正午尻矢岬(尻屋崎)を西方12海里に認め、異状なる急潮北流せるを発見したり。夜10時半、函館山の外方に至り、総帆を収めて汽走し正夜半、函館港に投錨す。函館碇泊3日間に於て、用炭22トン、清水21トンを補充し、生徒は陸上見学をなさしめ、又魯国領事を訪問して、ペトロパウロスク行航の意を告げ、健康証を受領したり。其間に於て内地諸方面に大水害を及ぼしたる低気圧兆候は該方面を通過せり。

7月27日　午後2時半、函館を発し汽走、津軽海峡を通過す。午後12時40分、(松前)小島沖に至り微風を得て機関を停止し、装帆宗谷海峡を指す。

7月29日　午後8時、利尻島の南西方約25海里に至り無風となり、続いて微東風、濛霧を催す。是より連日細雨濃霧に襲はれ、縮帆漂航その霽るるを得ず。

8月 1日　朝、霧少しく晴れ、礼文島の一端を認めたり。其より汽走して宗谷海峡に向ひしも東風浪漸く募り、午後に至りて激風となり、海峡に向ひ難きに至りしを以て、納沙布岬(野寒布岬)の風下側坂下村沖合に仮泊す。其夜進航中測深を行ふ事屢なりしに、左(下)記位置に当り、海図未示の一礁脈を発見せり。

東経141度36分40秒　北緯45度25分30秒　深さ20尋(海図に52尋とある付近)

8月 2日　午前11時、天候稍快晴となりしを以て抜錨し、汽走して、午後3時宗谷岬を経過す。それより逆風浪漸く強く濃霧四辺を覆ひ、進航遅々たり。

8月 3日　午後10時、樺太東南端(新知床岬)の東方約30海里に至り、汽走を停止して帆走北東/東に進む。これより帆走すること5日。

8月 8日　午後4時、幌莚島(パラムシル)西側に至りしに、天候曇悪にして東風強烈となり、海峡以東の海上険悪なるを示せるを以て、北緯50度42分、東経156度12分に投錨仮泊して天候の静定を待つ。此辺は鱈の好漁場たるを以て実習を始めしめ、約300尾を獲て処理塩蔵す。

8月10日　天候静定したるを以て、午前9時半抜錨汽走し、11時幌莚海峡を通過し、11時25分北島岩の北方に至りて帆走に変ず。

8月12日　午前3時半、収帆して汽走に変ず。正午カムチャッカ東岸ウダシュッド島の東方4海里沖合に停止して鱈漁を試む。水深40尋海底を得たるも薄漁にして且つ魚体稍小に好漁場と称し難きを認む。午後2時24分、試漁を停止し、再び汽走してペト

ロパウロスクに向ひ、夜半アバチャ湾口を通過す。

8月13日　午前2時50分、ペトロパウロスク港に投錨す。午前8時、郡長レーフ氏に医官1人及通訳事務官アレキシン氏と共に臨検し、其筋の通知により本船の来航を待ち受け居たるを語り、乗組員随意上陸見学を承諾して退船したり。小官は黒田技師と上陸、邦人竹村廣吉氏に通訳を託して、カムチャッカ洲長官プレリョフ氏を往訪したるに、見学上の便宜は同官の権内に能ふ丈け与へん云々懇談せられ、特にオセルナヤ漁場は見学上資するに足るものあるべきを告げられ、寄港を許諾されたり。それより小官は更に郡長、市長及碇泊艦マンジュール艦長を往訪したるに、暫時後、先方より答礼来訪あり。在留邦人亦多く来船す。

8月14日　洲長官は目下建設中の博物館を特に開き、本船生徒の見学に供し、郡副官は邦人中村直記氏を通訳として説明を務めたり。蒐集せる材料未だ多しとせざるも、古今寒帯土人の手工に係る毛皮、獣骨の細工品は頗る珍奇のもの多かりき。午後小学教員、生徒、牧師、無線電信技師等来観し、本船生徒を学校に招待して茶菓を饗したり。午後8時、洲長官プレリョフ氏は本船職員一同を茶会に招待したり。此日、露国巡視艦コマンドルベーリング号は我猟虎船海皇丸を捕拏し、来着したり。聞く所によれば、当年既に小富士丸の捕拏せられしあり。又昨年の耕洋丸等あり。共に遺憾の感なきを得ずと雖も、干渉客喙すべきにも非ず。空しく傍観したり。

8月15日　缶水20トンを補充し、午後7時半抜錨汽走してシプンスキー岬の西湾沖合に向ふ。

8月16日　午前5時40分、同湾沖合に至り、深さ30尋内外の個所数々鱈の試漁を行ひたるも、薄漁にして魚体大ならず。午後6時50分抜錨汽走、復航路を取る。此日所獲鱈115尾を塩蔵す。

8月17日　午後4時、占守海峡を通過して、オゼルナヤに向ふ。恰も此時、猛風巨濤襲来し、船体動揺甚だしく、濃雨暗黒呎尺を辨せざるに至りしを以て縮帆躊ちゅう法を行ふ。

8月19日　天候回復、風浪静まる時に本船は幌莚島の西方約30海里にあり、一旦之に入港して鱈漁実習諸準備整頓の上、オゼルナヤに回航するは最便宜と認めたるを以て、午前4時幌莚島村上湾に入港す。

8月20日　午前2時、村上湾を発し、オゼルナヤ河口に向ふ。同所寄港は先にペトロパウロスク長官より好意上特に許諾を与へられたるものにして、現に露人経営の鮭卵製造所あり。又約3千トンの冷蔵汽船ローマン号は欧州市場に生魚輸送目的を以て来泊中なれば、一見の価あるべしと信じられたり。而して本船は午前8時15分、同地沖合に着したるも恰もローマン号は他方面に回航の後にして、実見を得ず。更に教官指導の下に生徒総員を上陸せしめしに、予てより斡旋通訳を託せんが為め紹介を得置きたる池田某氏も亦ローマン号に乗組みて不在にて、只邦人漁夫の取締として雇主と漁夫間の俗通弁をなせる鈴木某ありしも、我来着の真意を通ぜしむるに足らず。辛ふじて村長、警吏等を首肯せしめ、各所の案内せしめ得たるも、質問、説明

共に隔靴掻痒の感あり。然しながら河流内鮭鱒の豊富、河口付近のトッカリ獣群棲を目撃し、錨地付近一帯の鰈族を以て充てるを認め、同州漁場一例を視察し得て、正午帰船したり。而して該地沖合は即ち当季の好鱈場なるを以て、本船は直ちに抜錨し出去する事約3海里にして投錨。午後2時より4時まで就漁せしめ、598尾を獲て処理塩蔵す。

8月21日　午前4時半より、鱈漁実習を行ふ。8時稍薄漁となりしを以て、錨地を約2海里北西に移して再び就漁し、午後4時終業す。本日所獲794尾。午後7時処理を終て再び錨地を約2海里北々西に転ず。

8月23日　午前4時30分、錨地を北西に稍2海里転移す。7時より出艇就漁せしむ。午前10時半風浪起りたるにより、直ちに諸艇を一時納む。所獲701尾あり。午後2時半風浪益々強悪にて本船の碇泊亦危険なるに至りたるを以て、抜錨汽走、占守島に向ひ、夜10時半同島ペットフ湖沖合に投錨す。終夜大雨強風あり。

8月24日　午前4時、抜錨徐行し、6時27分ペットフ錨地に投錨す。8時各教官指導の下に生徒総員をしてペットフ湖内鮭鱒探見に赴かしむ。午後4時探見隊は餌料鱒数百尾を獲て帰船す。此日終日濃雨降り、南東風強し。

8月25日　午前8時40分、抜錨沖出し、10時25分、東経156度13分、北緯50度45分、28尋泥底に投錨して就漁す。午後3時強き西風来りたるを以て直ちに中止し、諸艇を納めて抜錨汽走避難し、5時15分村上湾に入港す。本日所獲1,227尾。午後9時処理を終る。

8月26日より30日まで、天候不良引続きたる為め、村上湾に碇泊したり。其間生徒は毎日2～3時間ずつ機関術講義を聴かしめ、其他の時間は他船員と共に各種事業実習又は水取洗濯等に応用せしめたり。此頃鱈漁船は多く同湾に入港し、猟虎船も2，3隻入港したる事あり。本船は彼等の依頼に応じ、時辰儀遅速測定等の便を与へたり。

8月30日　午前7時、抜錨帆走海峡を通過して占守島の東側に向ふ。11時無風となり汽走に変じ、2時北島岩の北東3海里に当りて投錨し、鱈漁を試みしに、大鮃(おひょう)2,3尾、鱈数尾を獲たるに過ぎず。

8月31日　午前5時、抜錨汽走、幌莚海峡を通過西航し、東経156度51分、北緯50度10分に投錨し、各艇を出漁せしむ。午後3時濃霧襲来の為め信号を以て各艇を招還す。本日所獲1,735尾に達し、本年の最多数たり。午後9時半処理塩蔵を終はる。

9月 1日　未明より西強風となり、漁場に碇泊し難きを以て午前2時抜錨汽走、占守島片岡湾に向ひ、4時入港す。午前9時生徒に陸上見学をなさしむ。正午北西風となりて片岡湾錨地は安全ならざるに至りしを以て上陸員を招還し、対岸村上湾に転錨す。

9月 2日　午前、天測を以て時辰儀差を測定す。午後機関長の機関術講義を聴かしむ。

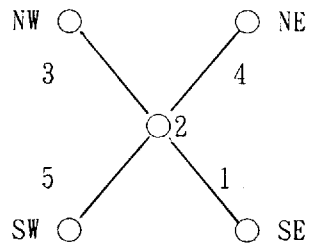
9月 3日　午前6時、抜錨出航。7時30分、東経156度10分、北緯50度50分に投錨して、就漁す。11時漁獲予定額に達し、用塩余裕なきに至りしを以て終業し、再び村上湾に帰りて投錨す。本日所獲500尾にして、通計約7,201尾に達したり。午後4時半処理を終はる。

6-K (2K)

9月 4日　猛烈なる北西風となり、守錨警戒を行ふ。午前9時より生徒は機関術講義並に海上衝突予防法講義を聴かしめ、他船員は船内掃除、航海準備雑業に従事せしむ。

9月 5日　捕鯨艇を以て清水を取り、出航用意完整す。

9月 6日　朝、函館の漁業船丹久丸業務主山崎梅太郎なる者来船し、同船の漁夫23名幌莚島白川にて鱈漁に従事し、目下終業季にて引上げの為め屢々同船を回航したるも、風候宜しからず、漁場に近づくを得ず。滞陸者は糧食余裕なきに至り、戻るを告げ、本船出航の際、白川沖まで丹久丸を曳き寄せん事を懇願したり。白川は村上川より南西約8海里に在り、本船出航の際之を曳くに就ては僅かなる迂回に過ぎざるを以て其請願を容し、午前8時半同船を曳て村上湾を抜錨し、10時半白川沖に達して同船を投錨せしむ。それより本船は針路を西方に取り、米国水先図に示せる鱈漁場に向ふ。但し同漁場はオコツク海の中央に在り、東経149度、北緯54度30分に位し、符して第1号漁場と記せるものにして、我鱈漁者は久しく其有無如何を確知せん事を欲せるも、探見に要する往復航程遠大なるを以て未だ之を実行し得たるものなきが故に、本船は今航の帰途迂回航路を取り、之が探見をなさん事に決したり。午後1時アライト島が経過し、北々東雄風を得て汽走を中止し、帆走北西方に進む。是より順逆諸風に対して帆走する事6日にして、9月12日予定の位置に近づき、汽走探見に従事したり。其方法は水先図に示せる位置を中心とし、直径24海里の圏内に於て左(下)の略図の如く5点で測深を行ひたりしも（4）の位置に於て320尋海底を得たるのみ。其他4点は330尋を以て尚無底なりき。



(1) 149°21.5'E	54°37'N	330尋	無底
(2) 149° 2' E	54°49'N	同	上
(3) 148°45.5'E	54°57'N	同	上
(4) 149°19' E	54°57'N	320尋	海底
(5) 148°52' E	54°37'N	330尋	無底

以上の如くなりしより、セントジョンズ、コットバンクは位置に大なる誤差あるか、又は不存在と認むるの他なく、本船探見も亦空に帰したるを以て、午後6時（5）の位置より再び装帆して、樺太に向ひ、諸風に対して帆走南進する事7日に及ぶ。

9月19日　未明、樺太新知床岬付近に至りて無風となりしを以て機関を用意し、午前11時汽走を始め、午後3時55分大泊に投錨す。

9月20日より24日まで、大泊に碇泊す。此間に於て黒田技師、鎌田技手、川上助手等は大泊支庁及豊原樺太庁に出頭し、同地水産見学調査の便宜を求め、水産技師中村隆氏の来船を請ふて、生徒に聴講を得せしめ、支庁技手東郷氏の指導によりて、田中武兵ヱ鰊漁場及建網使用法を実見せしめたり。而して他船員は船体機関等防腐方、鱈手返等雑務に従事せしめたり。

9月21日　鱈手返用塩不足分1,200斤補充す。

9月25日　午前6時15分、抜錨汽走す。午後1時宗谷海峡の中部に位せる二丈岩に座礁せる一汽船を認め、之が実見をなさしめ参考に資せしめん為め、其付近に停船して2艇

を下し、鎌田教官指導の下に生徒総員を派遣す。該岩付近は海豹(あざらし)の棲息地にして、群獣咆哮の響高く、屡々本船付近に群来するを見たり。我領海に於て同獣の棲息せる礁岩頗る多きに拘らず、独り日本海の孤岩竹島に於て小規模の従業者あるを聞くの他未だ其猟に従事するものなきは解し難き所にして、其毛皮としての貴重物たらざるも直ちに以て放擲し去るべきに非らず。之を製革せば用途あるべく、其脂肪は油とし肉を肥料とせば、必ず労を償ふに足る事業たり得べし。其猟法も未だ聞く所なしと雖も、猟虎(らっこ)、膃肭臍(おっとせい)の如く銃殺によるは不可なるが如し。彼等肥大の肉体に対し、一二の銃丸は恰も鯨を射撃するに異ならず。負傷の結果、他日或いは斃死するに至らんも即時に捕獲し能ふべからず。思ふに流網又は或る特種係蹄具を使用し、一回にして多数を獲するの方を取り、一年一場僅かに両三回を行ふに止め、各場を巡猟せしめば、彼等猟具の恐るべきを覚へる暇なく、且つ繁殖上にも悪影響少なかるべし。固より捕鯨業と等しく一定の制限を付して競争乱獲の弊なからしむるを要するのみならず、捕鯨以上の少数者に限らざるべからず。其区域に限りあればなり。要するに、水産の一遺利たるの感ある所にして、須らく考究すべきものならんか。午後3時、艇を召還し、再び汽走航行し、午後9時32分稚内港に投錨す。稚内碇泊中、黒田技師、鎌田技手指導、生徒をして鮭建網実地使用上の調査を行はしむ。

9月28日　未明、北風猛烈にして激浪侵来す。元来稚内港は北方の解放の地にして、錨地岩底なるを以て北風は最も安全ならざるのみならず、強風高浪に対しては縫航にあらざれば進航し難く、夜間縫航は両岸の礁脈危険なきを得ざるが故に本船は三大錨を投入して繋泊し、且つ機関を用意して非常場合の準備をなし置きつ、天明を待ちたり。午前5時東天白むと同時に順次各錨を抜き始め、6時抜錨終りて前進を試む。然し尚風強く、諸円材等を直面に圧し、濤は高くして推進器空転するが故に、直進して出港するは不可能事たるを以て、汽帆両方を併用して北東より北西に縫航し、逆転を行って４回にして午前7時35分納沙布岬を経過したり。これより北風は更に最良の順風たるを以て、直ちに汽走を停止し、満帆を展開して小樽に向ひ快走す。正午利尻島鬼脇を経過し、大汽船3隻避難碇泊せるを認め、日暮焼尻島の西方を航送す。

9月29日　午前1時、無風となりしを以て機関を用意し、2時20分収帆汽走し、午前9時55分小樽港に投錨す。小樽碇泊中、小官は各教官と高島水産試験場、小樽水産学校及札幌大学？（注　札幌農学校は明治40年に東北帝国大学農科大学に改組）、道庁水産課に出頭して生徒見学上の便宜を請ひ、本所長の命を請ふて各教官指導の下に生徒一同を札幌に出張せしめ、同大学、製麻会社、麦酒会社等見学をなさしむ。而して同大学より教授野沢、藤田、和田等諸氏及水産科生徒等本船に来観したり。

10月 6日　生徒山本三策は背部腫物切開の為め入院を要し、上陸願出でたるにより許可す。本日用炭55トン、水21トンを補充す。

10月 8日　午前7時、小樽出港汽走す。午後2時半逆風募り雨を催し、且晴雨計降下して天候不良を示したるを以て、神威岬沖合に於て汽走を停止し、重帆を装して漂泊す。

夜9時風位右稍順風となりしを以て、総帆を展して南航す。

10月 9日　正午、奥尻海峡を通過し、夜11時半白神灯台を経て津軽海峡に入る。

10月10日　午前2時50分、三厩沖に至りて不定風となりしを以て帆を収めて汽走し、午前5時半青森に入港す。青森碇泊中、同県水産試験場長渡会絹三郎氏に県下水産の講話を請ひ、生徒をして聴講せしめ、又市内見学を行はしむ。其間に於て、市長、議員、実業者諸氏、師範学校、商業学校、中学校等の教員及生徒等来観者約２千名に達したり。

10月11日　生徒野崎知之は、父逝去の報に接し帰省の為め上陸出願したるにより許可す。

10月12日　午後6時半、抜錨汽走、函館に向ふ。但し偏東風にして天候不良の兆ありしを以て、函館港に於て回復を待たんが為なり。

10月13日　午前1時14分、函館に入港す。函館碇泊中、水産物陳列場、魚市場等に就て調査せしめ、其他の時間は機関長の機関術講義を聴かしめたり。

10月16日　午前7時20分、抜錨汽走す。午前10時汐首岬の東方約10海里に至りしに、東北東風浪大に募り進航し難きに至りたるを以て、再び函館に向ふ。午後2時半同港に投錨す。

10月19日　天候回復したるを以て、午前7時10分抜錨汽走出港す。10時50分尻矢岬に至りて汽走を停止し総帆を展して帆走し、正午尻矢岬を経過し、日暮は八戸沖を過ぐ。

10月20日　午前5時、鍬ヶ崎に入港す。8時黒田技師、鎌田技手指導の下に生徒一同上陸し、同地水産学校見学に赴き、芳賀教諭の講話を聴き、午後同港内設置せる大謀網実地調査に赴き、日暮帰船す。其夜12時抜錨出港す。

10月21日　午前10時、金華山海峡を通過す。時に北東風大に強く晴雨計下降して天候漸く不良の兆あり。10時金華山の南西側に仮泊す。3時半再び抜錨汽走して鮎川港に向ひ、4時20分同港に投錨す。

10月22日　北東暴風雨となる。午前8時黒田、鎌田両教官指導の下に生徒一同上陸し、捕鯨会社の鯨処理場調査に赴き、正午帰船す。

10月23日　午前8時、教官指導の下に生徒一同ミハイル号見学に赴き、正午帰船す。時に暴風漸く過ぎ、天候回復に近きたるを以て出港用意をなし、午後1時45分抜錨汽走し、2時15分網代島を過ぎ、3時半好風に乗じて帆走に変じ、快走し塩屋埼灯台を過ぐ。

10月24日　順風益々強く進航速にして、午前10時半犬吠岬を過ぎ、午後9時半野島沖に至る。是より汽走に変じ、夜半館山に投錨す。

10月25日　漁具漁艇を上げて倉庫に納む。

10月26日　午前、専売局官吏の臨検を待ち受く。其間生徒及船員を二分し、一分は陸上に送りたる艇ドーリーの塗方、漁具乾方等に従事し、一分はヤード及諸帆解き下し方等に従事す。午後同官吏臨検を終り、鰹5,520尾(内20尾は　しもの)を北水丸に渡す。

10月27日　陸揚漁具取戻付方及倉庫貯蔵の破損艇運搬等に従事す。

10月28日　午前8時館山を発し、午後‥‥

衛生状態

別紙岩崎事務員提出報告の通り最も良好なり。

札幌見学調査報告書

小樽碇泊中、札幌出張見学中、生徒の調査したる事項は別紙報告書に明細なるを以て添付提出す。

海洋及生物調査

川上助手専ら之に当り、航跡到る所に之を行ひたり。其報告書は同助手より提出すべし。

生徒実習状況

生徒は熱心に実習を行ひ、従来に比して欠席者は甚だ少く、大体良好の進歩をなしたるを認む。

航跡及正午位置

別表及添付略図に挙げたり。

右(上)の通り御報告__也

明治44年10月31日　　雲鷹丸船長 浅利孝爾

水産講習所長　下　啓助 殿

明治44年11月2日

農商務省水産講習所 実習船雲鷹丸船長　浅利孝爾

水 路 部　御中

拝啓

昭和44年8月1日午後8時、別紙略図面上に赤点圏を以て示したる付近航行中、濃霧に遭ひ屢々測深を行ひ徐行中、概圏上にて突然25尋岩底を得、続いて20尋岩底を得。大に怪しみ居りし瞬間、恰もより納沙布灯光を正東(羅盤方位)に認めたり。次に南東に少しく進み(約4分1海里)52尋海底を得たり。それより本船は坂下村沖合に徐行の途に於て、該灯光の距離を測定したるに正東に当りたる時、8海里半なるを発見したり。降雨暗夜にて該灯光の他には更に見るものなく、且航進中多少流潮を感じたるもあるべきを以て、精細の位置とし難きも灯光方位は確実にして距離も殆ど真に近かりしものと信ぜり。

右(上)御報告申上ぐ也

6-8(28)